

令和 3 年 6 月 15 日現在

機関番号：32606

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2020

課題番号：16H03479

研究課題名(和文)近代日朝関係の基礎的研究 未刊行史料を中心に

研究課題名(英文)The basic research of the Japanese-Korean relations before and after Annexation of Korea in 1910 using the unpublished materials

研究代表者

千葉 功(CHIBA, Isao)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：50327954

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：現在の日韓関係を規定する韓国併合や日本の初期朝鮮統治政策を考えるうえで最重要人物である寺内正毅宛ての約2770通の書簡を翻刻して、全5巻で刊行するプロジェクトを進めた。既に2017年度には、発信者(五十音順)が青木周蔵～大久保春野の111人575通については『寺内正毅関係文書 一』として刊行した。続く発信者(五十音順)が大隈重信～後藤新平の151人560通についても、2021年度中に刊行すべく、作業を行っている。また、上記史料群の翻刻と併行して、同史料群を利用しつつどのようなことがいえるのかに関し共同研究を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「寺内正毅関係文書」は質量ともに重要な史料群でありながら、くずし字で書かれているため、十全に利用されてこなかった。また、今回の翻刻プロジェクトでは、近年の新出史料も収録している。本プロジェクトでは、寺内宛ての書簡約2770通という大部の史料群を活字化することで、中国史・朝鮮史研究者や海外の研究者にも容易に利用することを可能にする。よって、特に3つの主題、すなわち 第一次世界大戦を中心とする大正政治史、日本の初期朝鮮統治、さらには 明治・大正期の日本陸軍などにおいて新たな知見をもたらす、研究を活性化することが期待される。

研究成果の概要(英文)：We have advanced the project that we would publish about 2770 letters to Terauchi who is the most important person in terms of thinking Japanese policies toward Korea before and after Annexation of Korea in 1910. The 575 letters of 111 people to Terauchi was published as Selected Papers of Terauchi Masatake, vol. 1 in 2019. And we are doing the work to publish Selected Papers of Terauchi Masatake, vol. 2 including 560 letters of 151 people by the end of 2021. We have conducted join research using the above-noted letters, also.

研究分野：日本近代史

キーワード：寺内正毅 書簡 大正政治史 朝鮮政策 第一次世界大戦

1. 研究開始当初の背景

近年、東アジアの日中韓三国の間では歴史認識の問題が起きており、各国間の親善を阻害している。日本に関しては、韓国に対する植民地支配の問題と中国に対する戦争責任の問題があり、ともに現在の日本の対外関係に大きな足かせとなっている。このような問題に対し、歴史家は直接に解決することはできないにしても、史料にもとづいて事実を明らかにすることはでき、そのことは歴史認識の問題の解決に寄与すると確信する。

研究代表者は従来、日露戦争をはさむ 1900-1919 年の日本外交を、日本が多角的同盟・協商網をどのように模索し構築しながら、それが崩壊にいたったのか、当該期において外務省がどのように「自律化」していったのか、日本が仲裁裁判条約に対してどのような対応を採ってきたのか、という観点から研究し、『旧外交の形成』(2008 年)として一書にまとめることができた。また、研究代表者は、日露戦争ないし韓国併合時の総理大臣である桂太郎の一次史料の整理・翻刻・刊行を行い(『桂太郎関係文書』2010 年、『桂太郎発書翰集』2011 年)、それをもとに、桂の伝記的研究も刊行した(『桂太郎』2012 年)。

その後、研究代表者は、日清戦争がどのようにして日露戦争につながったのか、さらに、そもそもなぜ日清戦争が起きたのかを解明する研究に着手した。それは、日本近世史ならびに中国史研究の近年の潮流に対して日本近代史の方から応答するために、特に次の観点から行うものであった。すなわち、「華夷秩序」がどのようにして西洋近代的世界秩序によってとって代わられたのか、「日本型華夷秩序」のもとにあった日本がどのようにして西洋近代的世界秩序の論理に従って行動するようになり、一方で「華夷秩序」を再編しつつも維持しようとする清や朝鮮に対してどのように接してきたか、という観点である。このような観点から、研究代表者は平成 25-28 年度の科研費基盤研究(C)「日清・日露戦争期日本外交の基礎的研究 未刊行史料を中心に」の助成を得て研究を進めた。その結果、「日清・日露戦争」や「西徳二郎と近代日本 外交を中心に」という論文を発表するとともに、研究の基礎となった「陸奥宗光関係文書」「西徳二郎関係文書」の翻刻を行った。

また、既に、今回の研究代表者・分担者・連携研究者のうち、千葉功・山口輝臣・伊藤幸司によって、山口県立大学所蔵の「寺内正毅関係文書」についてのシンポジウムを 2014 年 1 月に開催し、その成果と主要史料の翻刻を書籍(伊藤幸司・永島広紀・日比野利信編『寺内正毅と帝国日本 桜園寺内文庫が語る新たな歴史像』、勉誠出版、2015 年)として刊行した。2015 年 5 月には、今回の研究代表者・分担者によって「寺内正毅関係文書研究会」を立ち上げ、どのように研究を進めるかの段取り(史料の複写・翻刻の日程や、翻刻した史料にもとづく共同研究のあり方)について話し合った。また、山口県立大学や防長尚武館所蔵の「寺内正毅関係文書」については、2015 年 8 月に予備調査を行った。一方、学習院大学史料館所蔵の「寺内正毅関係文書」をもとに、研究論文(「寺内正毅宛山県有朋書簡について」、『学習院大学史料館紀要』21 号、2015 年)を発表した。

2. 研究の目的

本研究は上記の研究の流れを受けて、特に現在の日韓関係を規定する、韓国併合にいたるまでの日本の朝鮮政策がどのように形成され、また韓国併合後の日本の朝鮮統治の特質がどのようなものであったかを、未刊行史料(近年の新出史料を含む)をもとに研究しようとするものである。

韓国併合を考えるうえでの最重要人物は、言うまでもなく、寺内正毅であろう。寺内は、陸軍において、山県有朋・桂太郎・児玉源太郎という流れの陸軍長州閥を継承した人物である。特に、1902-11 年の約 10 年間陸軍大臣を務め、「寺内体制」と呼ばれるほどの影響力を発揮した。そして、1910 年には陸軍大臣を兼任したまま韓国統監となり、桂太郎総理大臣に呼応する形で、韓国併合を現地韓国で進めた。寺内は韓国併合後もそのまま朝鮮総督に横すべりとなり、1910-16 年の 6 年間、朝鮮総督を務めた。すなわち、日本による初期朝鮮統治を形成した人物である。そして、1916 年には総理大臣となって、1918 年までのいわば第一次世界大戦後半期に総理大臣を務める。寺内内閣期には総力戦体制への模索が始まり、また 1918 年にはシベリア出兵という干渉戦争にふみきった。このように、韓国併合前後の日本の対朝鮮政策のみならず、大正政治史や陸軍などを考えるうえでも、寺内は最重要の人物のひとりである。

それにもかかわらず、寺内の関係史料は、研究上、本格的には利用されていない。なぜならば、国立国会図書館憲政資料室所蔵の「寺内正毅関係文書」のうち、特に寺内に宛てられた膨大な書簡群は、点数(総計 2,651 点)が多いうえにくずし字で書かれていることもあって、従来翻刻されてこなかったからである。さらに、近年(2013 年)になって、大磯の寺内家に保管されていた寺内関係史料が、研究代表者の所属する学習院大学史料館(総計 35 点、他に寺内寿一関係史料も多数寄贈された)と山口県立大学(総計 789 点)とに分かれて寄贈された。この 2 つの機関の史料は、憲政資料室所蔵分とは別途保管されてきたもので、まったくの新出史料である。いわば「泣き別れ」状態にある 3 つの機関の史料群を統合して横断的に翻刻・共同研究することによって、大正政治史や日本の初期朝鮮統治などについて多くの事実を知らせてくれるであろう。

例えば、韓国併合にいたる過程と日本の初期朝鮮統治の実態がわかる。寺内宛ての書簡群には、

例えば明石元二郎(89通)や長谷川好道(46通)、児玉秀雄(25通)など、朝鮮関係者からの書簡が多く含まれる。ちなみに、中国関係者も多く、特に、西原亀三(34通)の書簡からは西原借款の実態がわかるであろう。また、もともと一次史料の少ない大正政治史において、多くの発見が期待される。寺内宛て書簡群には、後藤新平(67通)・大島健一(44通)・勝田主計(36通)など寺内内閣の閣僚からの書簡が多く含まれている。よって、近年全巻が完結した『大隈重信関係文書』(みすず書房)とあわせて、本研究によって寺内内閣について明らかになれば、第一次世界大戦と日本という観点からかなりのことが明らかになるはずである。さらに、陸軍長州閥の継承者として、山県有朋(121通)、田中義一(77通)、桂太郎(37通)などからの書簡も多い。史料群が大部なので、これ以外にも多くの歴史事実が明らかになるであろう。

次に、本研究で寺内と並んで注目する人物は、井上馨である。

井上は、1879-87年という長期間、外務卿(外務大臣)を務め、朝鮮半島をめぐる日清が衝突した壬午事変(1882年)・甲申事変(1884年)に際して、日本の方針を定めたのが井上である。また、後者の後始末として日清間で天津条約(1885年)を結んだあと、10年間にわたって武力衝突のない、いわゆる「天津条約体制」が現出するが、それに大きく貢献したのも井上である。一方で、この「天津条約体制」が10年後の1894年に崩壊し、日清戦争となった後、井上は全権公使として朝鮮に派遣され、いわゆる「甲午改革」の担当者となった。しかし、この「甲午改革」は失敗に終わり、日清戦争後の閔妃殺害事件・俄館播遷とあわせて、日露戦争に向かっていくのであり、韓国併合へとつながる日本の朝鮮政策を考えるうえで、井上は寺内とならんで最重要人物といえよう。もちろん、井上は財政政策や財界とのつながりなど、元老として様々な分野で影響力を発揮しており、朝鮮政策以外の面でも重要である。

このように重要な井上であるが、井上の関係史料も寺内の場合と同じく、点数が膨大で多岐にわたり、かつくずし字で書かれているため、十分かつ全面的に利用されるにはいたっていない。すなわち、「井上馨関係文書」(国立国会図書館憲政資料室所蔵)は数量が4,821点あり、おおきく書簡の部と書類の部に分かれている。書簡は、木戸孝允・伊藤博文・山県有朋・陸奥宗光・渋沢栄一・吉田清成など350名以上から送られている。書類は、政治・行政関係、大津事件、条約改正、朝鮮関係等の外交関係、財政、銀行等の経済関係、鉄道や鉱山等の実業関係、山口県関係、曹洞宗分離問題、東本願寺財務整理問題など多岐にわたる。しかしながら、翻刻されていないこともあって、「井上馨関係文書」も本格的に利用されるにはいたっていない。よって、「井上馨関係文書」の特に書簡類を翻刻し、かつそれにもとづいて研究を行うことで、並行して行う上記の「寺内正毅関係文書」の翻刻と共同研究に多角的な視点を与えることができる。

研究代表者は、上記の研究目的(韓国併合にいたる日本の朝鮮政策がどのように形成され、また韓国併合後の日本の朝鮮統治の特質がどのようなものであったかを分析すること)を研究するにあたって、その重要な基礎となる「寺内正毅関係文書」ならびに「井上馨関係文書」を翻刻し、出版という形で公開することをあわせて行いたい。基礎となる史料の翻刻・公開は、利用しやすいかたちで提供することで、海外の研究者を含む広範な研究者の利用に供することを可能にし、当該分野の研究自体を活性化することが期待されるからである。そして、本研究によって、現在のもつれた日韓関係をほぐすことに少しでも寄与することを強く期待する。

3. 研究の方法

・研究の基礎となる「寺内正毅関係文書」「井上馨関係文書」は複写をしたうえで、研究協力者(大学院生・オーバードクター5人)の協力によって翻刻・電子入力してもらい、電子入力された史料を、研究代表者・研究分担者・連携研究者でチェックして字を確定する。翻刻した史料は、史料集として刊行するための具体的作業を進める。

・上記の史料をもとに、その書簡群からどのようなことがわかるのかを中心に、研究代表者・研究分担者・連携研究者が自由発表を行う。最後の研究発表会はシンポジウム形式にして公開して行うとともに、発表内容をもとに論文集を刊行する。

(研究体制)

千葉功(研究代表者): 国立国会図書館憲政資料室・山口県立大学・学習院大学史料館所蔵史料担当、翻刻史料による研究(主に外交史の観点から)、全体のとりまとめ

季武嘉也(研究分担者): 国立国会図書館憲政資料室所蔵史料担当、翻刻史料による研究(主に内政史の観点から)

山口輝臣(研究分担者): 国立国会図書館憲政資料室・山口県立大学所蔵史料担当、翻刻史料による研究(主に思想史の観点から)

熊本史雄(研究分担者): 国立国会図書館憲政資料室・山口県立大学所蔵史料担当、翻刻史料による研究(主に外交史・アーカイブズ学の観点から)

長佐古美奈子(研究分担者): 国立国会図書館憲政資料室・学習院大学史料館所蔵史料担当、翻刻史料による研究(主に博物館学の観点から)

伊藤幸司（連携研究者）： 山口県立大学所蔵史料担当、翻刻史料による研究（主にアーカイブズ学の観点から）

大学院生・オーバードクター5人（研究協力者）： 史料の翻刻・電子入力

4. 研究成果

（1）「寺内正毅関係文書」の翻刻

本研究課題の最終目標は、山口県立大学や学習院大学史料館所蔵の新出史料はもとより、従来から公開されていた国立国会図書館憲政資料室所蔵分においても、目録において通数しか記載されなかったために従来ほとんど利用されてこなかった B 群の書簡群も含めて、寺内宛ての書簡群（通数にして約 2770 通）を悉皆翻刻して刊行するとともに、それをふまえて共同研究することである。

「寺内正毅関係文書」については、作業の前提として必要な史料の撮影ないし画像ファイル化を完了した。国立国会図書館憲政資料室所蔵分については、書簡の部と書類の部をともに、憲政資料室配架の複製版から電子式複写を行い、さらに書簡の部については作業効率を考慮して、アルバイトを使用して PDF ファイル化した。また、山口県立大学図書館所蔵分については、既に 2015 年 8 月 26-28 日に史料調査と撮影を行い、寺内正毅宛ての書翰と書類の一部を撮影していたが、その際、撮影漏れの史料を撮影するため、2017 年 3 月 21-23 日と追加の史料調査・撮影を行い、作業に必要な史料の画像（JPEG）ファイル化を完了した。さらに、学習院大学史料館所蔵分については、既に史料館での展覧会（2014 年 9-12 月、「桜園明宝展」）に備えて寺内宛て書翰を撮影済みであった。ちなみに、戦前期において寺内家所蔵史料を調査・翻刻した史料（「寺内伯爵家文書」、宮内公文書館所蔵）も、翻刻するうえでの参考史料として、画像（JPEG）ファイル化した。これら画像化ファイルした史料は、USB メモリをもって共同研究者に配布し、共有化することができた。

続いて、寺内宛ての書簡の翻刻作業にとりかかった。ただし、書簡群の点数が膨大なため一度に全書簡を翻刻・刊行することも困難であるため、5 巻本を想定して、2017 年度は第 1 巻として、発信者（五十音順）が青木周蔵～大久保春野の 111 人の 575 通の翻刻を行うことにした。研究分担者にわりふりをした結果、8 月には翻刻文をそろえることができた。さらに、巻末に、「寺内正毅関係文書」の伝来（寺内正毅・寿一が設立した桜園寺内文庫から始めて）や概要、ならびに本刊行物出版の経緯を述べた解説を付したうえで、10 月に科学研究費補助金の「研究成果公開促進費（学術図書）」に応募した。その助成金が平成 30 年 4 月に交付されたので、分担して 400 字詰原稿用紙にして約 1560 枚という大部の原稿を元の書簡とつきあわせて校正するというたいへんな作業を 3 回行った。その結果、2019 年 2 月に、東京大学出版会から無事、『寺内正毅関係文書 一』を刊行することができた。

さらに、続いて 2019 年度には第 2 巻として、発信者（五十音順）が大隈重信～後藤新平の 151 人 560 通の翻刻を行うことにした。研究分担者にわりふりをしたうえで、巻末に「寺内正毅と近代日本」という解説を付して、2019 年 10 月に科学研究費補助金の「研究成果公開促進費（学術図書）」に応募した。ただし、この 2019 年の申請は交付が認められなかったため、翻刻文の精度をあげるため、再度全文を見直したうえで、2020 年 10 月に再度、「研究成果公開促進費（学術図書）」に応募した。幸い、今回は交付内定となったので、現在は 2021 年度中に『寺内正毅関係文書 二』を無事刊行できるよう、校正作業を行っている最中である。

以上みてきたように、当該期において量や質において豊富な大部の史料群を刊行し、本史料群を用意に利用することが可能となることによって、大正期の政治、日朝関係、第一次世界大戦など、多くの分野において研究が活性化することが期待される。

（2）「井上馨関係文書」の翻刻

「井上馨関係文書」については、井上馨宛ての書翰すべての電子式複写を完了した。また、既に部分的に翻刻を終え、電子ファイルへの入力を進めた。ただし、「寺内正毅関係文書」の翻刻と共同研究を優先したために、「井上馨関係文書」の方はほとんど進展しなかったのが残念であった。

（3）研究会の開催

以上の（1）「寺内正毅関係文書」の翻刻・校正作業を行いつつ並行して、学習院大学を会場として研究会を行った。2016 年 9・12 月開催の研究会では、寺内正毅ないし寿一の史料群の背景をなすアーカイブズ学的研究が報告された。2017 年 6 月開催の研究会では寺内正毅ないし寿一の史料群に関する研究報告が 4 本行われ、翻刻作業を進めるうえで大きな刺激となった。2018 年 6 月開催の研究会では、半日以上長時間にわたって寺内正毅に関する 3 本の研究発表と活発な質疑応答を行い、新たな知見を蓄積することができた。そして、2019 年 12 月開催の研究会では、半日以上長時間にわたって、寺内正毅に関する 4 本の研究発表と活発な質疑応答を行い、新たな知見を蓄積することができた。

（4）講演の実施

また、研究代表者は 2019 年 10 月 27 日に山口市主催で寺内正毅没後 100 年記念講演会「寺内

正毅と近代日本」という講演を行った。この講演では、『寺内正毅関係文書』と対応する寺内正毅発信書翰と、寺内正毅没後時の回想集から、寺内の人物像を探ったものである。講演のために用意した原稿（400字詰原稿用紙91枚分）は、『寺内正毅関係文書 二』の解題として収録する予定である。

（5）関連文献の発表

研究分担者のうち、季武嘉也は『日記で読む近現代日本政治史』（ミネルヴァ書房、2017年）を、熊本史雄は『近代日本の外交史料を読む』（ミネルヴァ書房、2020年）を、それぞれ刊行した。前者は日本近代史研究において書簡と並んで重要な日記史料を読み解くものであり、また後者は戦前期の公文書のうち残存状態の良い「外務省記録」（外務省外交史料館所蔵）を素材として近代日本の公文書管理体制の特質を述べたものであって、本研究と密接に関連する研究内容を社会に還元したといえる。

また、研究代表者・研究分担者・連繫研究者を中心として、寺内正毅関係文書の翻刻と共同研究のために「寺内正毅関係文書研究会」を組織している。「寺内正毅関係文書」のうち新出史料が大磯の寺内家から学習院大学史料館へ寄贈されるのにあわせて、正毅の長男寿一の関係文書も寄贈された。その「寺内正毅・寿一関係資料」のうち南次郎の寺内寿一宛て書簡を使って、「寺内正毅関係文書研究会」のメンバーによって、「寺内寿一宛て南次郎書簡 解題と翻刻」（松田好史・長谷川怜・西山直志・芳澤直之）（『学習院大学史料館紀要』第27号 2021.3 pp51-82）が刊行された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 千葉功	4. 巻 288
2. 論文標題 日露戦争観の過去と現在	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 新しい歴史学のために	6. 最初と最後の頁 3-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松田好史・長谷川怜・西山直志・芳澤直之	4. 巻 27
2. 論文標題 寺内寿一宛て南次郎書簡 解題と翻刻	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 学習院大学史料館紀要	6. 最初と最後の頁 51-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 千葉功
2. 発表標題 寺内正毅関係文書と第一次世界大戦研究
3. 学会等名 東アジア近代史学会研究大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 寺内正毅関係文書研究会	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 576
3. 書名 寺内正毅関係文書 一	

1. 著者名 黒沢文貴・季武嘉也編	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 378
3. 書名 日記で読む近現代日本政治史	

1. 著者名 杉並歴史を語り合う会・歴史科学協議会	4. 発行年 2016年
2. 出版社 大月書店	5. 総ページ数 310
3. 書名 隣国の肖像 日朝相互認識の歴史	

1. 著者名 熊本史雄	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 394
3. 書名 近代日本の外交史料を読む	

〔産業財産権〕

〔その他〕

研究代表者は2019年10月27日に山口市主催で寺内正毅没後100年記念講演会「寺内正毅と近代日本」という講演を行った。この講演では、『寺内正毅関係文書』と対応する寺内正毅発信書翰と、寺内正毅没後時の回想集から、寺内の人物像を探ったものである。講演のために用意した原稿（400字詰原稿用紙91枚分）は、『寺内正毅関係文書 二』の解題として収録する予定である。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山口 輝臣 (YAMAGUCHI Teruomi) (20314974)	東京大学・大学院総合文化研究科・准教授 (12601)	
研究分担者	長佐古 美奈子 (NAGASAKO Minako) (20537279)	学習院大学・付置研究所・学芸員 (32606)	
研究分担者	季武 嘉也 (SUETAKE Yoshiya) (40179099)	創価大学・文学部・教授 (32690)	
研究分担者	熊本 史雄 (KUMAMOTO Humio) (70384021)	駒澤大学・文学部・教授 (32617)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	伊藤 幸司 (ITO Koji) (30364128)	九州大学・比較社会文化研究科(研究院)・准教授 (17102)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関